V-3　石巻市釜谷地区釜谷集落　　2012 年 11 月 2 日（金）

報 告 者 名　岡山　卓矢　　被調査者生年　1948 年（男）
調 査 者 名　岡山　卓矢　　被調査者属性　旧釜谷集落住民（V-3 話者）
補助調査者　土佐美菜実

話者について

話者の自宅は町裏にあった。北上川に並行して流れていた富士川沿いの大川小学校近辺に松並木があったが、その周辺の土地が松裏である。父は昭和 54 年、母は昭和 20 年に亡くなっており、独身である話者の独居であった。松裏住民は契約講は中講に属すことになっており、病院付近から河口側が下講との境となる。

話者が契約講に加入したのは、父が没して翌年の行事からである。また年齢により契約講をアガってから、今年で 10 年になる。

契約講について

契約講の名前を神風講（しんぷうこう）という。

講員の代替わりは、現役講員である父親の死亡か、息子本人の結婚による。結婚して代替わりするのは 20 歳以降が多いが、父親が早くに亡くなって 18～19 歳で契約講に入る者もいた。

講長は 2～3 年だかが任期の交代制だが、講長本人の都合でこれより早く辞めるという場合もある。なお震災当時の講長は、三反走仮設ではないが、近くに引っ越して住んでいる。

契約講の講員の家に不幸があれば、講員は皆線香をあげに行く。また土葬時代は、逮夜には、契約講員達で埋葬用の穴を掘る決まりだった。講員である夫が出られない場合、その奥さんが代わりを務める。

また火災が出ないようにと、センターで契約講員達が秋葉山を拝む行事があったが、1 月の行事だったと思う。

大般若経巡行について

元は正月 8 日の行事で、契約講員の参加者は多い頃で 7、80 人もいたが、のちには 50 人程度と少なくなっていた。般若経の箱を 6 つ担いで巡行するが、箱の中に本が入っているそうで、6 箱で合計 600 巻入っているそうだ。毎年のようにテレビ局が取材に来たものだ。

行事の衣装のうち、履物はワラジからゾウリへ変わっている。20 数年前までは、契約講が金を払って老人クラブがワラジ作りをしていたのだが、これを作れる人達が亡くなり、市販のゾウリを用いるようになった。手作りだった頃は、ヤンベエな（報告者注 : 適当な、の意）造りのものもあって、ものすごく大きいなどした。

上着には羽織を着て、また下半身は股引を着ける。歩くためバサバサ出来ないので、尻まくりに履く。

行事前夜は講員達が交流会館に集まり、テエマエの給仕と、その奥さん方の調理で精進料理を食べる。18 時だったか、集合時間が決まっていた。なお交流会館とは元の生活センターで、近年建て替えたものだった。献立の基本はツユ（汁物）とご飯で、お神酒で清める。

行事当日は 5 時起床、6 時集合で、やはりお神酒で清めたのち出発となる。とても寒く、焚き火もするが、服装に厳しく帽子を被るのも許されない。講長の挨拶のあと、観音寺に収めてある大般若経とシシを出し、オッサン（オスサン・和尚さん）と共に巡行が始まる。釜谷地区を廻り、谷地中が巡行の最後の場所である。谷地中まで行くと観音寺へ戻り、大般若経とシシをまた収める。契約をアガった年寄りや役員達は観音寺で、赤飯などの供物を準備しており、寺へ戻った講員達がこれを食べる。またこうした供物は、食べれば風邪を引かないとされ、持ち帰って

少しずつ家族にも食わす。

春祈祷

春祈祷は元は 2 月 8 日の行事だったが、会社勤めの講員が増えて日曜開催と変更された。春祈祷には背広で参加する。シシフリも背広でするので、変わった見た目である。

寺からシシを借りてきて、稲荷神社から出発する。シシはテエマエが前日に借りてくるのだったと思うが、よく覚えていない。テエマエがこうした段取り全般にあたる。

講員達は朝 8 時にセンターへ集合し、福地（隣接地区）の神職（福地の大河原在住）を呼び、祈祷してもらう。天照皇大神宮の掛け軸を飾り、シシとお神酒を据えた祭壇をつくってのお払いである。福地の神職はこの祈祷後に帰る。一行は釜谷の西から、谷地中方面へ向かって進む。

また 2 月 5 日および 10 日のどちらかに午の日があたる年は、この日に初午の行事もする。

稲荷神社について

10 月 19 日は神社の祭礼だったが、親分（神社役員）と長面の神職だけで拝むだけの祭りにした。10 月 21 日には長面の祭りがあり、こちらは神楽もしたそうだ。明日 3 日は、どこだかの地区で文化祭があるそうだが、他所が祭りをしているのを聞くと寂しくなる。

12 月 20 日過ぎくらいに神社役員が、歳神と天照皇大神の札を配りにくる。神社役員には津波で流され死んだ人もいるので、残った役員が分担して配っている。三反走仮設のほか、運動公園の仮設にもいくらか釜谷出身者が入っているし、個人でアパートなどに移った人もいるが、それら全てを回って札配りをする。

三反走仮設について

話者宅のある第 1 仮設のほか、川向いにすぐ第 2 仮設がある。家々は「1-1」や「3-5」のように、列番号と家番号がふられて場所の区別がされる。釜谷と尾崎からの避難者が多いが、3、4 列に釜谷の人が多く住んでおり、特に 3 列目は全戸が釜谷の人である。1 列も数軒がいるが、他の列はポツポツといる程度である。第 2 仮設にも 2〜3 戸の釜谷の人がいるはずで、仮設全体で釜谷出身者は 30 軒いるかどうかだと思うが、実際に釜谷の人が何軒いるかは知らない。

11 月 6 日に、釜谷の集団移転に関する地域説明会がビックバンを会場に行なわれる。集団移転にはまだ 4〜5 年かかるだろうが、加わる人はあまりいないだろう。新たに家を建てられるような経済状況の人は既に仮設からアパートや新築に移っており、それが出来ない人がこの三反走仮設に残っているからである。

契約講の総会について

総会は毎年 11 月 23 日に開く。上中下の 3 講が集まるが、近年は各講がそれぞれに旅行へ行くなどしていた。ただし交代で 1 講は居残ってセンターで飲み食いをし、釜谷で火災が起きた時など有事に備える。これはどの講での火事だからということなく、釜谷の火事であれば釜谷の消防団や男達が出動するが、旅行で若い年代の男が皆不在となるのを防ぐためである。

被災時の状況について

被災後は何度かインタビューを受けた。3 月 11 日はとにかく立っていられない地震だった。隣の家の大将が話者のところへ来て「強いぞ、逃げる段取りしないと」と言ってきた。話者も避難しようと、懐中電灯やらを自分の軽自動車に積んでいると、広報車が来て女川の方で 5、6 メートルの津波だと放送していた。隣近所の様子を見にいったところ、寝たきりの婆さんを連れ出そうとする人も、小学校から子供 3 人を連れ帰ってきた母親もいた。そのうち北上川から富士川（北上川より集落側の運河）へ水があふれ出してきたのが見え、その近所の母親へ「子供を家に置いていたら駄目だ、車で逃げろ、高いところへ」と声を掛けたあと、話者も逃げた。交流会館へ避難しようかとも思っていたが、ここは逃げるなら大川小裏の山だと思い、そちらへ向かった。地震から津波が来るまで 40

分近くはあったようだ。逃げる途中、見かけた人らに、避難するよう随分声を掛けたが、皆は大丈夫だといって聞かなかった。せいぜい浸水で濡れるくらいと思ったのか、車から「逃げろ」と言っても、笑って手を振り逃げようとしない。話者が山へ逃げたのは津波がくる直前となった。その時、大川小学校にはまだ大勢が逃げずに残っていた。部落の人達も小学校の校庭へ避難していたが、同じように「大丈夫だ」などと言っていたのでないか、と思う。逃げろと言っても、皆腕を組んで足を構えていて、津波を待っているようなものだった。

その後津波が来て、車を降りて波に追いかけられるようにして山を登った。途中、小学生達が列になっていたうち、最後の方の列だけが山へ行くのを見た。まだ登らずにいる子供達もいた。山へ逃げたあとは誰も見当たらず、家がバラバラと流されてくるのを見ていた。自分１人しか生きていないのでないかと思っていたら、どこからか「誰かいねえか」との声が聞こえた。そちらを見るとずぶ濡れの男がぶるぶる震えて立っていて、女の子がいるから助けてくれと言ってきた。小学２年生の女の子がつぷっと水に浮きながらも生きていて、山近くへ流れ着いていた。水が引いてはもう助けられなくなるので、竹を掴ませ引っ張ってその女の子を山にあげた。大川小学校に通っていた 108 人のうち、74 人は死んだ。言うことを聞かなかった大人も皆流された。またおばさんやお袋だのを連れに行った人達も、死なずにすんだ人は何人もいない。隣の家の大将も、家におばあさんがいたのでそれを助けようとして死んだ。はじめに逃げようと思っていた交流会館にも、何人かは避難していただろうが、そちらで助かった者は誰もいない。釜谷全体で約 200 人も死んだ。かえって海がすぐ側にある尾崎などは、1 人 2 人しか死んでおらず、これはすぐにちゃんと逃げたからだ。どの家でも誰か彼かは亡くなっており、死人を出さなかったのは一人暮らしだった自分のとこやＴの家を含め７軒くらいかもしれない。自分もお袋がまだ生きていたら、わさわさしているうちに死んでいたと思う。そんなふうに死んだ人がなんぼもいた。話者の甥っこもまだ遺体が見つかっていない。

逃げた人達は雄勝へ向かう山のトンネルへ集まり、15 人くらいで火を焚いて１晩過ごした。逃げろと言った近所の３人の子供と母親もここへ来ており、助かっていた。翌朝千葉自動車屋が残っていて何人か避難しているのが分かり、皆でそちらへ合流した。

13 日だったか 14 日だったか、入釜谷方面から信号付近まで来て釜谷を見ると、堤防は切れ家々が１軒も残っていないのが分かった。信号のところには死体がごろごろあって、もう住めないべなと思った。その後、買物に出たまま帰れずにいたという釜谷の女の人に行き会った。その女性は、地震後ずっとビックバンに避難していたそうで、話をしていると釜谷に家々が残っていると思っているようだった。

ああいう津波がくるとは思わなかった。３月９日にあった地震もかなり揺れたが、その時も津波が来るとの頭はなかった。

写真１　平成 14 年の大般若巡行時の集合写真

写真２　仮設住宅内の神棚